日豐線宇島驛
鉄道省指定運送店
通 宇島運送合資會社
電話五五番

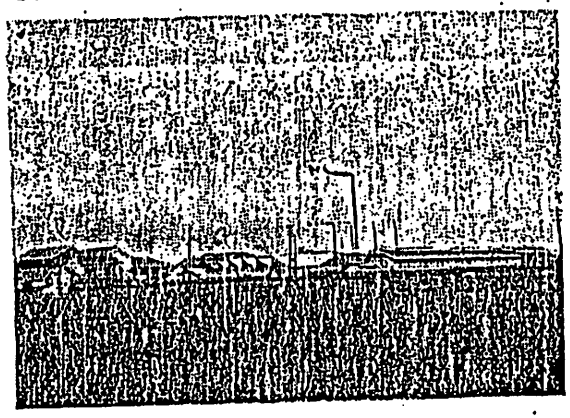
宇島鐵道沿線案內

發行所 宇島鐵道株式會社

會社の概況

創立　明治二十九年四月
資本金　二千六十六万六千六百円
工場數　二十七工場
釜數　八千釜
從業員　一万五千人
製絲製産高　四十五万貫
蚕種製造高　六十万枚

郡是製絲株式會社



郡是製絲株式會社宇島工場

宇島工場の概況

所在地　築上郡三毛門村沓川（宇島停車場ヨリ十丁　宇島港ヨリ五丁）
創立　大正十一年二月
場長　甲斐雄
從業員　六百五十人
繭買入高　（年）十八万貫
製絲製産高　二万貫
釜數　三百六十二釜

内科一般　院長醫學博士　波多野重與

小今井病院

外科　産婦人科
眼科　レントゲン科　診療毎日

豐前宇島町
電話一〇一番

坑木商

福岡縣築上郡宇島港
株式會社　柴田商店
電話特長四八番

同所　大木商店
電話特長五九番

同所　是永商店
電話特長二九番

築上郡八屋町
株式會社 築上銀行

築上郡八屋町
株式會社 八屋銀行

築上郡宇島町
株式會社 宇島銀行

右三銀行ハ合併シ株式會社北豐銀行ト改メ昭和四年一月一日ヨリ營業ヲ開始ス

はしがき

宇島鐵道は海陸の運輸交通最も便利なる宇島港より山水の風景極めて絶佳なる耶馬溪に通ずる一路十哩强の輕便鐵道にして沿線各停車場には千歳の歴史を有する上代文化の遺跡多く天然に惠まれたる風光明媚の景勝亦少なからず。併かも本鐵道の終点たる耶馬溪驛前水氣淸冽たる山國川に架設せる大平橋を渡れば直に昔禪海大和尙が三十餘年の努力に成れる洞門の絶景に入り早くも仙境に在るの快感に打たる。

抑も、耶馬溪は櫻花爛熳たる春の日も、魚鼈溪流に躍り新綠濃かなる夏の日も、將た又紅葉溪山に花と咲き、兩岸錦繡を織り出す秋期も、飛雪紛々

積雪皚々たる冬期も、春花秋月避暑凌寒四季好適ならざるなきことは今更絮説を要せざるべし。左れば本鐵道沿線の歴史的旧蹟を尋ね、又は天下の絶勝耶馬渓の風光を探らむと欲する人士は日豐線宇島驛にて下車。直に本鐵道を利用せらるゝこと最も便利にして興趣深し矣。

歴史の智識に富みて公共的觀念熱烈なる吉村鉄臣氏岡爲造氏は何等の好意で今回本鐵道の爲めに特に沿線の名所旧蹟等調査の勞を執らる、依て之れを印刷して沿線案内記を作り旅行者各位の參考に供す。

宇島鐵道沿線案内

宇島驛

八屋町　宇島驛のある所は八屋町の地域に屬する、全町は郡内第一の都會で人口五千余、八屋警察署、八屋郵便局、築上商等女學校、築上農學校八屋銀行、築上銀行等があり、海岸を八尋濱といふ。

八尋濱　和爾雅に「豐前八尋濱あり、國人のいふ、八尋濱は上毛郡蛯屋のわたりを云ふ」と見えて居る。北突出した先を明神ケ鼻と稱へ、厳島明神、俗に云ふ辨才天の祠がある。古くから名の知れた所で、一に八劔濱と言ひ、山田村大字四郎丸の大富神社の祭禮には神輿の御幸があり、八屋祇

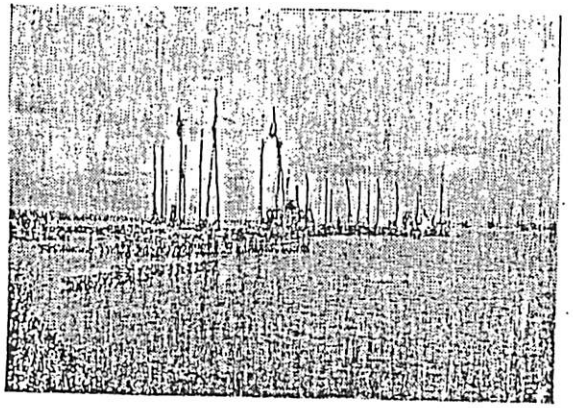
園といてつ大に賑ふのが毎年の例となつて居る。夫木集に、

八尋濱　大宰大貳高遠

春の日の遥にみちて見わつるは
八尋の濱をゆけばなりけり

とある。明神の鼻から西に向へば入江を隔てゝ松江海岸の松並木が見え、東に向へば帆檣林立せる宇島港があり、松風濤聲常に相和し、千鳥の打群れて翔ぶ景色は實に何ともいへない。一度は必ず杖を曳きて俗塵を洗ふべきである。

宇島町　八屋町の東にあつて殆どつゝいて居る。港町で商家、料理屋、漁家の混合世帶の町である。人口三千三百余、其の東近くの三毛門村大字



沓川に郡是製糸工場があつて盛に煤煙をあげて居る。

宇島港　海岸に珊瑚礁の如き防波堤があつて帆檣林立し、廣い埋立には鐵板製造工場があり石炭の山のある所之即有名な宇ノ島港である。此地はもと赤熊の地先の濱で、小松生ひ荊棘繁茂し、其洲には鵜が群居して糞を干して居たので鵜の島と云つて居たさうである。然るに文政の初領主小倉の小笠原侯か築港を企て、

其の五年に小祝、高濱の漁家三百計りを移住せしめ市街を作らせた。其時今の文字に改めたとの事である。築港は文政四年四月に工を起し、全十一年正月功を竣へたことが埠頭に建てる築港記念碑及び豐前國志に見ゆて居る。三毛門南瓜の産地三毛門村に隣して居る。

松江　八屋町の西南三十二町、角田村の大字で小市街の形をなして居る。入江を隔てゝ八屋と相對し鱸をもつて名高い。支那に松江の鱸といふが見ゆるか此處にも鱸がとれ附近にお腰掛の舊蹟がある。

御腰掛　日豐線松江驛の東に小高い處に老松が叢生して居る、此處がお腰掛の舊蹟である。其由來はといへば、昔宇佐宮へ朝廷から勅使がたつて居た。之を宇佐の使と云ひ、和氣清麿の故事から和氣氏の人が之に任ぜられて居たので一名和氣の使ともいひ此の使が宇佐宮へ參向の途次休憩のため風景よき此の所を選んで休憩所を設けられたので其名を得て居る。今此所に老松が枝を交へて居るのは其參向毎に記念として植ゑたものだとの事である。之から船入まで舊國道の東に松並木があつていかにも景色が佳い。

大富神社　宇島驛から西南約半里。縣社で山田村大字四郎丸にある。祭神は十柱、中殿は住吉の三神、右は八幡宮で應神天皇、仲哀天皇、神功皇后、左は宗像の三女神。其他に齋主神即經津主神を祀つてある。抑々大富神とは中殿住吉神を言つた事は豐前誌に「抑々當社御鎮座の始は不詳、社記云、成務天皇戊寅八年五月大富社に忠災を祈りて印有、又仲哀天皇戊三年同社に雨を祈ると見ゆ大富神は甚も古く起りたる事に覺ゆ云々」と

あるにて知られる。

八幡神を祭つた年代は又同書に「天武天皇之白鳳元壬申年八幡大神を九月十日奉迎而中殿に鎮祭あり」と見ゐ、

宗像三女神鎮座の年代につきては同書に「宗像之神御鎮座者不詳」と見ゐて居る。

毎年八壽濱に御幸がある、此の事も豐前國志に「毎年八劔の濱にて祭禮あり、六月十九日御祓の日右字々の子孫（代々神殿守護山田氏、大宮司清原氏、長谷川氏、次官清原氏とあるをいふ）多く殘りて神輿に供奉す、此の内一人色替りを着す、外は都て烏帽子白衣を着す、此の夏越の御幸に豐前樂を奏す、此の日祭式尤も嚴重也、遠近より見物人群集せるを思ひ繼ぎて

かくは、

大富の神にしませは豐國の
後の榮をなほも祈らむ　　吉近

とにかく築上郡内にても有數の古社である。

勅使井　大富神社の境内に今も殘つて居る。同社記に「宇佐宮勅使當社に入たまふとき此井の水を奉りし古例により、今猶宇佐宮勅使度ごとに八屋驛御旅館御茶の水は此井より奉る事は去元治元年甲子度も國君より仰せられける、神主山田氏清祓して奉りけるぞ尊くも灼然たる事ぞもなり」。と見ゐて居る。

拜み松　大富神社の北八町位の處に一本の老松があり、俗に拜み松とい

つて居る。第四十八代稱德天皇の神護景雲三年和氣淸麻呂が宇佐宮に神勅を承りに參向した時、行路から大富神社を拜したので其所を休拜野と云ひ、今一本たつて居る松を拜み松と云つて居る。今上陛下がまだ皇太子時代大演習御統監にお出になられた際此松の下まで自動車をお寄せになられた。下に記念碑があり、「和氣公拜社舊蹟、川内谷廢藏建之」と刻してある。

千束驛

千　束　此地もと千塚原と稱し古墳の多い原野であつた。然るに小倉小笠原の支藩が幕府長門再征の役當時此地に移つて小市街をなしたのに始まつた。此附近に築上中學校がある。

旭城趾　千束驛の南近くに小笠原氏の宅趾があり、俗に旭城の趾といふ。千束小笠原氏は小倉小笠原家の祖忠眞の四男眞方が、寛文十一年築城墾田（松江天神原附近）一万石を賜はり、篠崎といふ小倉棟兵場内に屋敷を構へて居たのに始まる。然るに貞享元年築上郡内元上毛郡黒土、岸井の二手永合せて二十二ヶ村一万石と更へた。慶應二年幕府長州再征の時長州兵が小倉に切入つたので、八月一日小倉某火を城に放ち小倉城篠崎館共に燒け両主一時肥後に遁れ、篠崎小笠原氏は一時山鹿に滯在し間もなく田川郡香春に移り、十一月一日近江守眞直公上毛郡に入り、千束原に築宅を始め、明治二年十一月頃竣工し旭城と稱して移つた、之が千束小笠原家の始めで、間もなく廢藩置縣となつて破却し、今は只石垣のみ殘つて居る。

如法寺　千束驛より西南約二里、横武村大字山内にある。黄蘗宗の禪寺で小倉の足立山福聚寺末、本尊は觀世音菩薩、豊前國三十三所觀音の一となつて居る。宇都宮家譜に「文治中大和守信房建立座主少僧正生西信房三男也」とある。境内に宇都宮信房仝盛綱の墓がある。此の信房は鎌倉幕府より豊前守護職に任せられた人。盛綱は宇都宮信房の子孫で室町時代の人である。此の初代の座主生西の子孫は如法寺を氏とし天正の頃まで續いて亡んだ。又如法寺は昔坊中が多く餘程盛な寺であつたやうで有る。

川底の大楠　如法寺から南十町余、合河村大字下川底にある。應永二十七年八月二十五日、宇佐宮二ノ御殿（宇佐は西が一の御殿、八幡太郎を祭る、中二の御殿宗像三女神と同神、東三の御殿神功皇后を祭る）造營の時杣始の式を此の木の下で行ひ、引きつゞき造營毎に此處で仝式が行はれたと言ふ。宇佐宮寺造營日記に「應永廿七年八月二十五日壬戌日申刻杣始在レ之豊前國上毛郡昌河内、一瀬坂、山道別之大楠也、御殿已下儀式並役人等一殿ニ同ジ」と見えて居る。因に一御殿杣始は今の築城郡上城井村大字傳法寺の大楠の下にて、三ノ御殿杣始式は下毛郡眞坂村手斧立八幡宮境内の楠の下で行はれたとの事である。

耳垂の岩屋　川底大楠より西南一里、岩屋村大字岩屋にある。景行天皇十二年の條に天皇熊襲征伐の際豊國御木川上に耳垂と云ふ賊があつて皇軍に抗し平定された事が日本書紀に見え、両豊記に「耳垂と云賊の住し處は求菩提山の麓犬ケ嶽と云ふ云々」とか、山田大富社の縁起中「景行天皇云々

干時爲レ征二伐岩屋之土蜘蛛一勅令レ祈二神宮一」と見えて居る。此の御木川とは今の佐井川で耳垂の居つたと言ふは岩嶽川の上流に當るが、岩嶽川の水は殆ど下川底の邊で佐井川に合して居れば、佐井川の上流と言つて差支はない。

求菩提山　宇島驛から西南方五里、岩屋村大字求菩提にある。此山元は火山で常に烟を吐いて居たので雲母山と言つて居たさうである。今も山頂辰の口と云ふ所から常に小蒸氣が立昇つて居る。山上の神社は鄕社で國玉神社と云ひ、俗には求菩提山權現で通つて居る。祭神は顯國魂神（大巳貴命）諸、冊二神である。繼体天皇の御宇、猛鬼魔卜仙（タチルカクマボクセン）と云ふものが開いたので此卜仙は犬ヶ嶽の惡鬼を平げたとの事である。文武天皇の御宇役行者の入峯あつて修驗の法を傳へ、元明天皇の養老年間行善と云ふが居り、諸國寺を創め、山名を求菩提山と改められ、崇德天皇、近衛天皇の頃には賴嚴といふが居つて此の山を中興し、或は經筒を埋め、或は岩間にかけ或は法華經を銅板に刻しなどした。此の銅板法華經三十三枚は康治元年のもので今は國寶となつて居る。明應三年には聖護院の門主道興が此山に登り高祖以來の修驗道を嚴守せるを賞し二十人の長床を許し金襴の袈裟を許された之から當山は聖護院に屬し天台修驗道となつた。大內氏、大友氏よりの文書が多く保存されて居り、古器の多いことは又特別で、西田直養、は當國の法隆寺だといつて居る。維新の際迄三百余の坊中があつたが修驗道は一時廢止され、領主よりの扶持米を斷たれたので、數年の內に分散し、今は

僅かに十一戸を殘すのみである。而し豐前では有名な山であり、かく古文書、古器物が多いから、歴史家は必ず一度は登るべきである。

奉二呈求菩提山構現御寶前和歌二首一

准三后道興

我も下化衆生のために分入れは
上求菩提と名のる山かな

御熊野の山の山守待得てや
神も心の花を見すらむ

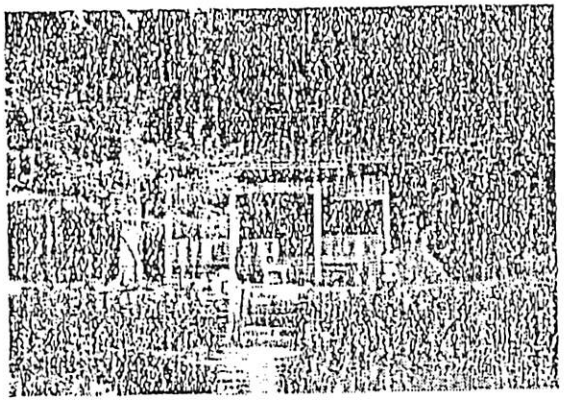
黒土驛　黒土村大字久路土にある。此の邊一体土色が黒い、其名も之から來たのだらう。純農村で一般に富み今では模範村と云ふ名譽を荷うて居る。

千束神社は此村の產土神で狹田の觀音は此所から參詣するが道順がよい。

千束神社　黒土村大字久路土にある。鄕社で境内に清水が湧出するので石清水八幡といつて居たのだが千束藩の中の主なる神社だから、明治四年かく改稱したのである。清和天皇の貞觀三年三月十八日夜、和氣清足が神諶によつて祭つたのが當社の濫觴であるといふ。正親町天皇の永錄五年豐後の大友の家臣田原紹忍が門司城主仁保就定を攻めた時其途中に當社を燒却した。大江匡房が宇佐參宮の途當社に參拜して詠んだ和歌といふが夫木集にのつて居る。

清水宮　大江匡房

ほさばやなしのをりかけてほす衣
清水の宮の流絶にせて



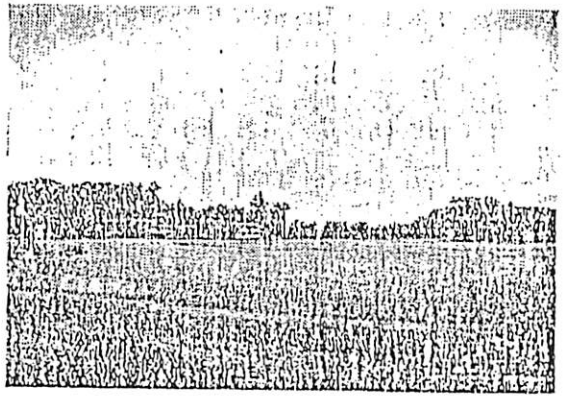
乳汁の觀音は黒土驛より數町南横武村大字狭間にある。佐井川を渡つて東に進めば屹立する岩壁の下に小堂があつてこゝに祀られて居る。豐前三十三ヶ所觀音の一所で堂の両側岩壁から水が垂つて居る。乳汁の出ない婦人は此の水を貰ひかへり粥を焚いてすゝめればきつと乳汁が出る。實に不思議である。夫で參詣人が四時絶ゑない。本尊は千手觀音の木像で行基の作と傳へ彫刻優秀の廉をもつて國寶に指定されて居る。

廣瀬橋驛　黒土村大字廣瀬、佐井川の西岸にある、此の附近日熊城趾。矢方池。牛王城趾。等の史跡や名池が有名である

矢方池　廣瀬橋驛から南五六町、西吉富村大字矢方にあり、築上郡第一の大池である。三つの池からなり水面反別合計七町五反八畝十九歩。西吉富、南吉富、東吉富、黒土、三毛門の五村二十八大字の六百十六町八反一畝二十五歩に灌漑して居る。本事業は初久路土の高橋庄藏氏が起工を思立ち、組合會を組織し、明治二十年十一月十九日時の上毛郡長清水可正氏を議長に推し、組合會規則を議決し、翌二十一年十月十九日郡長葉山荒太郎氏の認可に首まり、以來本組合の事業管理を郡長に委嘱し、葉山氏以下長

野恰、村岡益章の二郡長を經、高橋長種氏の時に及び、明治三十三年五月二十二日竣工し、實に十三の星霜を閲して居る。

牛王城趾　矢方池の西の丘上が即其趾である。豐前古城蹟集に「建久六年頼朝郷の課に依て佐々木三郎大夫頼綱築之、一族十人該所在城、嫡男頼泰成恒近江守と稱、同遠江守永頼、同民部亟頼俊、同下野守永氏、同太郎頼廣、數代綿々たり、頼廣が時菊池に討負落城す、其後矢方次郎正綱在城、天正八年矢方兵部亟野中と決戰討死城絶たり」と見ゆ。此の附近もと成恒庄と云ひ肥後人吉の藩祖相良長頼の領地であつた。成恒系圖に永頼母相良氏とあり此の舊蹟集に見ゆる永頼は長願にて其の子孫此所を領して居たのである。



日隈城趾　廣瀬橋驛の東北方數町の處によく似た小丘が二つ列んで居る。東を雄熊と云ひ西を日熊と云ふ。此の日熊丘上に城趾がある、之が即日隈城趾で日隈氏代々在城して居たが天正十六年三月黒田氏に滅ぼされた。

天正十五年豐大閤の島津征伐の時黒田孝高功を以て豐前國東六郡を賜はり、中津川城に居ることゝなつた、此の時築上郡内元の築城郡城井の宇都宮氏が豐公から

領地を奪はれたので城井の孤城に立籠つて黒田氏に降らず他の小城主亦之に應じて黒田に抗した。そこで孝高は先づ近邊の城から順次に平定しようと子長政を將とし後藤又兵衛基次等を副へ、歩騎三千余をして當城に遣らせた。城主日隈小次郎直次は豫て其報を耳にし、老將小栗村岡等をして城外に防がせた。豫て援を求めてあつた川底城主城井知房は自ら六百騎を率ゐ山田城主如法寺久明、下川底城主小畑長重は、田中委女、奥村勘解由、に各二百騎を率ゐさせて援けに來た。然るに黒田氏の兵强く知房は戰死し、味方は敗れて支ふることが出來ないので直次は城を焚いて自殺した。時は天正十六年三月五日の事であつた。

安雲驛　西吉富村大字安雲にある。此安雲に寺が見ゆるのは光林寺として眞宗本願寺派の大寺である。此の驛の南に當りて照日前の墓及び松尾山がある。

照日前の墓　西吉富村大字尻高、照日峯尾にある。昔照日前と云ふ公卿の姫故あつて此地に住み、綠なす黑髮を此處にある河流に滌いだが川の石皆黑色に染まつた之が黑川であるとの傳說がある。

松尾山　友枝村大字松尾にあり。安雲驛から約二里の南に當る。友枝村大字西友枝の横川からも登られる。山上に三社神社と言ふがあつて天照太神、大巳貴命、少彦名命の三柱を祀る。此の山はもと彦山の支配下に立ち修驗者の居つた所で、神社を松尾權現と云ひ松尾山記に「本尊釋迦牟尼如來大悲十一面觀世音、藥師如來」と見ゆて居る、つまり両部神道である。

…(二二)…

由來記に「松尾山開基行妙阿闍梨云々第二世來順法師云々聖武天皇御宇神龜五年能行上人當山春秋に峰踏始玉也云々」と見れば、つまり皇德天皇の頃行妙の開基である。然るに豐前國志には「松尾山、犬ヶ嶽の東に連り醫王寺在り大化年中能行上人開基にして彦山山伏に屬すとぞ法頭を高明院と云ふ」とは年代に相違がある、能行は法蓮の弟子で神龜頃の人なることは豐鎮善鳴錄にも「釋能行不ノ知二何許人一也嘗隨二法蓮和尙一于二彦山般若窟一精二研行法一神龜五年春登二豐之松尾山一云々」とあるに依つて知られる。

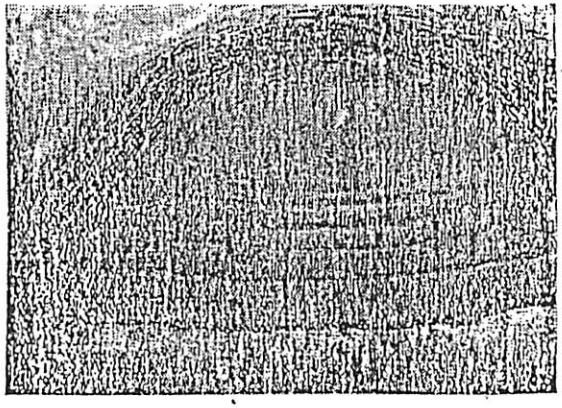
友枝驛　友枝村大字土佐非字新開にある、中津迄一里半。附近に宇野の櫻、桑野原、實業女學校、瓦窯趾、加能松城趾等がある。

宇野の老櫻　友枝驛の東北數町、南吉富村大字宇野磯貝邸內古墳の上にある。九州第一の老櫻で大小二股に別れ大股は周囲九尺五寸、小股の方は八尺で花時は見事であつたが漸次衰弱するので近年上部をきつて今は株のみが殘つて居る。此の磯貝氏は赤穗四十七士の

…(二三)…

一人磯貝十郎左工門の名跡をついだ家で十郎左工門に關係する文書、古器を多く藏して居る。此の邊もと非常に古墳が多く俗に宇野塚と云ひ數多き例に引かれて居た。而し今は開墾されて殆ど其形跡を認めないやうになつた。考古學者の見逝す事の出來ない地である。

桑野原　安閑天皇の御宇豐國桑原屯倉の置かれた地である。又天正十六、年三月黑田氏の日隈城を攻めた時鬼木惟宗、山田輝家、仝親貞、八屋刑部內尾兼元、友枝大膳、緒方帶刀、同刑部、田中委女等の將士日隈直次と合して黑田長政に抗し兩軍大に此處に戰つたが日隈方敗れ鬼木惟宗は戰死し他は各居城に逝け飯つたと云ふ、有名な古戰場である。委しい事は豐前軍記略と云ふ書物を見ればわかる。



瓦盥の趾　友枝驛の西方數町、雁股山の支脈が北に奔つて平地につきる所の東面にある。山麓を利用し土を斜堅に掘拔き、急斜面の階段十四を有し、上部をアーチ形にしてある。築上史談會長吉村鉄臣氏及北畿兄山口縣の考古學者弘津史文氏の發見で內務省の史跡考査官柴田常惠氏等と調査の結果、今では內務省史蹟保存地に指定されて居る。之は奈良時代の瓦窯の跡でかく完全に保存されて居るのは他

に類例がないとの事である。尙此の附近未發掘のもの三個所ある。考古學者は勿論、一般の人も知識慾を滿足するために一度は見學すべきである。

加能松城趾　友枝驛の南十四五町、友枝村大字東上、仝東下の界平地に隆起する丘上にある。二重の堀を廻らし戰國時代の城趾を研究するものは必ず見るべきである。天文の頃は內尾伊豆守親實、天正の頃には其子兼元が居つたが天正十六年三月兼元黑田氏と桑野原に戰ひ敗れて仝氏に降つた。

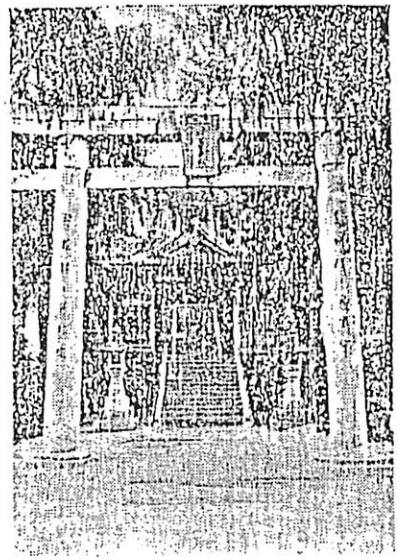
下唐原驛　唐原村大字野地にある。此の北二三町に八坂神社があり、又山國川を隔てゝ鶴市神社、大貞鳶社等がある。

八坂神社　俗に牛頭天王と稱し南吉富村大字亟水の產土神である。鄉社で素戔嗚尊及其妃稻田姬の二柱を祀る。由來はと調べて見れば人皇四十四代元正天皇の發老年間播磨の明石から勸請したとの事である。

山城名勝志に「諸社根元記云、記宣云、我天竺祇園精舍守護神云々故云祇園社」と言ひ、牛頭天王はかやうな事から一に祇園ともいふ。我が素戔嗚尊新羅に渡り、ソシモリの地に居た、ソシモリはソイモリで韓語は牛頭の意である。依つて素戔嗚尊と印度の牛頭天王とは同体とし素

幾鳴尊を牛頭天王と云つて祀つて居る。維新の際八坂神社と改稱した之も祇園の本社が明石から轉々移つて山城の八坂の地にあるからである。豐前志に「牛頭天王宮、垂水村にあり六月七八日祭禮なり八日夜明より近里の人々參詣して里人の苦木(トベラ)の枝を買るを買ひ持ち飯りて門の戸に挿すなり、然すれば必ず疫病の災を避くと云ひ傳ふ」とかいてある。之牛頭天王を一に除病の神とするからであらう。

この神社のある丘は山國川の左岸にあつて下毛平野を眼下に眺むることが出來る。大正九年十一月八日午后今上陛下未だ皇太子にまし〳〵たとき、大演習御觀戰のため御野立遊ばされ、金谷少將の戰況言上を御聽取あらせられた所である、其際御手植の松は年毎にみどりの色を增して居る。



鶴市神社　鄕社で下毛郡鶴居村大字相原の坂手隈の丘上にある。正座八幡大神、左速秋津彦、速秋津姫の二神、右に鶴市二神を配してある、委しくは八幡鶴市神社といふべきである鶴市二神は保延元年大非堰を築くに際し人柱となれる小鶴、其子市太郎の二靈を祀るものである。其頃沖代の田地は宇佐の神領で七人の地頭が之を支配して居たが、非堰が常にきれ

るので人柱を立つるときは井堰はきれぬとの事より袴を水に投じ先に沈んだものが之に代らうと七人相議して之を行つた所、湯屋基信の袴が先に沈み、人柱に立つことになつた所、妾小鶴其子市太郎が主人に代つて人柱に立ち之から井堰がきれぬやうになつたとの事で名高い。

鷹神社　俗に大貞八幡と云ひ下唐原驛より東約一里下毛郡大幡村大字大貞にある。縣社で仲哀天皇、神功皇后、八幡大神、比咩大神（宗像三女神と同体）を祀つてある、大宰管内志に「社説には宇佐宮についきて八幡大神示現の地、此社より先なるはなし、仁明天皇承和年中初めて此處に社を建て給へりと云ふ、宇佐宮より大貞まで其間四里あり云々」と見れば、三角の池といふがある由來は宇佐宮記に「大貞三角之池者、大神御霊行之時爲二

洒出二之寶池也云々宇佐國造池守守レ之蒔三百余歳」とあり、池中に三鍬があつて玉澤、鉾澤、鏡澤といつて三種の神器に擬して居る。昔宇佐宮行幸會の時は此池の鴈を刈つて御枕とし神輿に乘せて八個所の社に行幸があつた　である。

中唐原驛　唐原村大字上唐原にある、此の附近菅公經塚。唐原の梅林。等がある。

菅公經塚　中唐原驛より東數町、上唐原の天滿宮の側にある。天滿宮縁起によれば延喜二年秋菅原道眞宰府の配所を出て多布原村に乘丸の家を訪ひ後世に遺すため法華經を手寫せられたが後之を埋めて塚としたものだといふ。

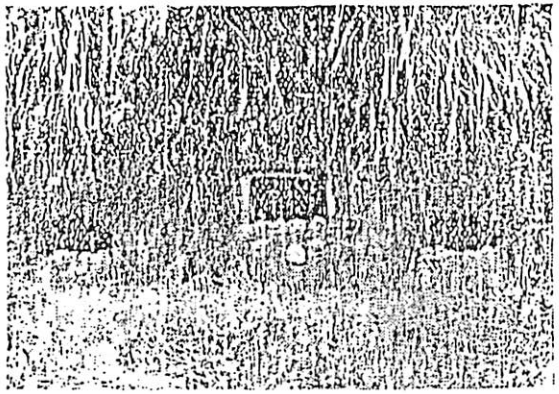
唐原の梅林　中唐原驛の東二町水出にある、梅林として花時杖を曳くものが多かつたが一大老梅一名鎧梅が數年前枯れてしまつた、此の木は周圍五尺計りで花時は見事であつた。而し其他鹿角梅、兜梅、梓弓梅、正尾梅、田入梅等がある。

百留驛　唐原村大字百留にあり、此の附近に百穴、といふがある。

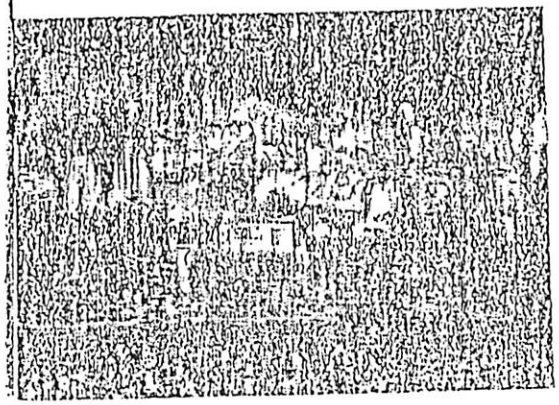
百留の百穴　百留驛の東北岩壁を横に穿つたもので約三四十ある。之は奈良時代以前の墓穴で中から曲玉金銀環等が出る、古墳研究者は是非見るべきである。

原井驛　唐原村大字原井にあり、附近に傾城石と云ふがある。

傾城石　妙円寺の上の山にある、こゝは友枝村大字東上と原井との界で此峠を俗に傾城越と言つて居る。傳へ云ふ、昔京都の美妓が情夫を慕つて此の地に來り終に憂死して石となつたと。一種の奇石で男子ならば子供でも此の石の上に登ると動き、女子ならば動かぬといつて居る。又此の石の邊に石塔があり又ついた杖を投げ捨てたのが芽を出して巨樹となつたとか、美妓が掬んだといふ京清水とかいふものも此附近にある。

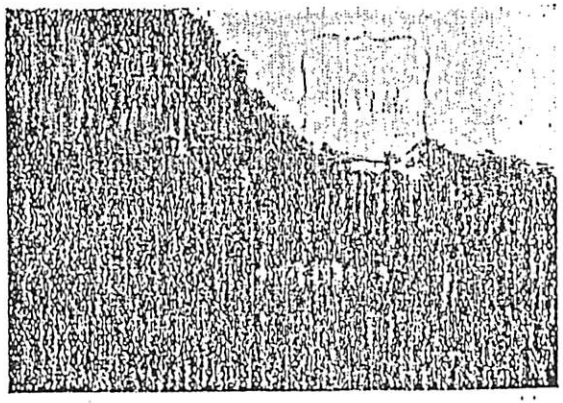


耶馬溪驛　唐原村大字有野にあり、字



島鉄道の終点になつて居る。こゝに弘法窟があり、山國川を渡れば耶馬溪の入口で羅漢寺は近い、

弘法窟　屏風のやうな岩壁を穿つて中に弘法大師の像を安置してある。窟の上に蛇秋蚓の黒痕がかすかに見られる、之は法華經の中の文句で大師のかき殘されたものだといふ、こゝに公園があつて弘法公園とか投筆公園とかいつて居る。又弘法窟の前に梅林が出來て居り花時は見事である。



小笠原長勝

投筆のすさびゆかしく岩の面に
のこりて見ゆる水茎のあと

羅漢寺　下毛郡上津村大字跡田にある。釋迦牟尼佛を本尊とし洞中五百羅漢、千体地藏を安置してある、考德天皇の大化元年法道仙人印度より來たりて基を開き次て南北朝の頃曆應年中、豐後田澁の僧円龍禪師來たりてかく石像を彫刻したものだといふ。

築上史談會　會長　吉村鉄臣　調査
幹事　岡爲造

昭和三年十二月十五日印刷
昭和三年十二月二十日發行

非賣品

福岡縣築上郡居原村原非一七二三番地
編輯者　高田倉太
福岡縣築上郡八屋町二〇二五番地
印刷人　大江俊明
仝所
印刷所　大江印刷所

福岡縣築上郡八屋町
發行所　宇島鉄道株式會社

外科一般
泌尿科。婦人科。耳鼻科
八屋八幡町一八一五
平醫院
醫學士　平國明
（電話一六四）

日豐線宇島驛前
坑木商 安賀商店
店主 安賀喜六

築上郡八屋町
株式會社 一木吳服店
店主 一木耕藏
電話六番

皮膚病
花柳病
外科一般

本院 八屋町八幡町
出張所 中津町三ノ丁潮湯前

高崎醫院
（電話六四番）

産婦人科
レントゲン科
内科

千束村塔田

久永醫院

外科一般
花柳病科
西外科醫院
築上郡唐原村
（電話三番）

內科
小兒科
花柳病科
入院隨意
宇島驛前
富松醫院
（電話四六番）

外科
眼科
内科
レントゲン科

福岡縣八屋町
西村醫院
（電話八屋九番）

日豐線宇島驛前
坑木商 相部商店
店主 相部秀雄

耳鼻科 梅毒科

築上郡千東村

菊池醫院

福岡縣築上郡黑土村

呉服太物商

田邊義治商店

振替福岡一七〇八九番

酢醤油
燒酎

醸造販賣所

神崎喜三郎

築上郡山田村船入

宇鐵線安雲驛前

内科

下野醫院

千代鶴・紅梅正宗
元造醸類酒
福岡縣築上郡黒土村
郡司掛一郎

醤油
築上郡唐原村下唐原
高西勘次郎

清酒醸造元
和才一雄
下毛郡眞坂村大田
電話鶴居局二番乙

末運送店
貨物自動車營業
米穀・肥料
農蚕具商

末壯一郎商店

耶馬渓線洞門驛前
宇鐵終点耶馬渓驛南三丁

純良清酒

耶馬正宗 醸
金鈴 造
福綠壽 元

宇鐵終点耶馬渓驛南五丁
耶馬渓線洞門驛本通

樋田昌彦

大平
金麦
銀麦
醸造元

宇鐵終点邛馬溪驛南五丁
邛馬溪線洞門驛本通
小川醤油店
店主 小川太一郎

共同石炭株式會社
電話百番

洋服ハ
新屋洋服店
宇島町郵便局隣

日豐線宇島驛前
耶馬觀光
御支度所
高等旅館
橋本屋
電話長二三番

大阪商船株式會社
宇島代理店
電話七三番
毎日
下リ午前三時
上リ午後十時半
定期寄港
四國經由阪神行
使用船　大分丸、松江丸、利根川丸、天龍川丸

薄鉄板製造
日本鋼業株式會社
來リ!! 働ケ!!
心身共ニ健全ナル者
最モ有望ナ薄鉄板製造業!
外國輸入額　二五萬圓
內國生產額　一五萬圓
尙此會社ハ陸海ノ運輸ニ便

雜穀砂糖麥粉諸油商
日華製油株式會社特約店
日本石油株式會社特約店
豐前八屋町
ワタリ商店
渡邊庄吉
電話陽園三二番
振替福岡三四八二番
製油工場　八屋町前川一一二二

耶馬溪線羅漢寺驛
宇鐵終点耶馬溪驛南十五丁

旅館 山國屋

耶馬橋北洞門ノ外
走流川犬走河畔

材木並建築材料商

日豐線宇島驛南一丁

石田製材所

店主 石田三司

電話八屋五〇番
振替福岡一三四二七番

銘酒 濱乃井
築上郡八屋町
醸造元 浦野酒場
電話五番

築上郡八屋町四ツ辻 電話一二〇番
齒科一般 榮森齒科醫院
齒列矯正科
ドクトル 榮森 亨
（舊姓 水野）

築上郡八屋町
日豐線宇島驛南二丁
御旅館 菊屋
炊江田治
電話二六番

豐前八屋町 電話三一番
やまと屋旅館
及料理部
店主 古椎

名産耶馬溪燒陶器窯元
總本家
株式會社 耶馬陶業場
元吉村松月園組織變更
大分縣耶馬溪青洞門通
振替貯金口座福岡 三八二五番

宇島地方特約販賣店
向野定造商店

宇鐵線友枝驛前
米穀肥料商 奥永輝雄

宇鐵線耶馬溪驛南三丁
耶馬溪線洞門驛本通(東耶馬溪村樋口)
吉野屋旅館
村上增太郎

日豐線宇島驛前
材木商 御木竹次郎
電話四三番

福岡縣築上郡八屋町
上森印刷所
電話一二六番

高等御旅館
眺望絶佳
高等料理部
新築併置
宇島驛ヨリ西南二丁
築上郡公會堂
築上郡自治會館
前
（電話長二一番）
築上館

宇島港
喜樂
角喜代治
電話一二三番

高等
御料理
仝
並ニ仕出し
八屋八幡町
玉丸井
島家清次郎
電話一三六番

後小路永治
電話六二番
永樂

日豐線宇嶋驛國道筋
炊江（カシキエ）
豐（ユタカ）商店
高級ラヂオ部
取附組立修理
家庭染料ヤコブス
森永煉乳部製品
星製藥會社製品
卸部

宇島……三河
友枝……二津
八屋……二津
友枝……八屋

乗合自動車

八幡町
永島自動車商會
電話一四四番

家傳胃腸病の妙藥
黄老丸
⊙定價 五十錢。一円。二円。三円。五円
福岡縣築上郡八屋町
製藥
本舗 大江清明堂
振替福岡九二八七番

活版
石版
福岡縣八屋町（宇島港）
株式會社 大江印刷所
電話三〇番
振替戸籍七五〇五番

築上郡友枝村宇鐵線友枝驛前
マルミヤ醤油醸造元
宮崎唯治商店

豐前宇島港
宇島石炭合名會社
電話 一八番
五一番
特長 五七番

創業 文政元年正月

フジヲ醤油

福岡縣築上郡豊川

醸造元 尾家悦藏商店

電話八屋一三七番

重松寫眞館

館主 重松茂幸

本館 福岡縣築上郡八屋八幡町

支店 大分縣中津町公會堂前